鹿児島県立鹿児島中央高等学校　～自主 好学 敬愛～
進路指導室だより 11月号
発行:進路指導部企画運営係<令和8年11月19日>

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」　のお話

ご存じ「夏目漱石(こころ)」での、若かりし「先生」がKに言い放った一言ですよね。

私の経験からして、この教材を扱う時期は２年生の調度この頃。本校もそうですが、国内体験学習を数週間後に控えた時期で、自主研修やディズニーランドへそれぞれの思いを馳せ、学習に身の入りにくい時期でもあります。授業で「こころ」扱う時、この場面で使う鉄板のネタが私にありますので、暫くお付き合い下さい。

「諸君！世間はこの時期から少しずつクリスマスに向け、街のあらゆる色が変わり始める。その最たる象徴がアミュプラザのクリスマスイルミネーションだ。そしてにわかカップルと呼ばれる人々が、まるでゾンビのようにその光に吸い寄せられる。加えて修学旅行という高校生活最大の行事まで後に控えているのだから、ここでカップルにならないと出遅れてしまう気になるのも無理はない。しかしながらその幸運？が自分に舞い降りてくれるとは限らない。シングルベルになることだって充分にある。そんな時はカップルに向かってそっと心の中で呟くのだ『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』と、これは決して負け惜しみなんかじゃないことは……」

閑話休題。私の好きな「内田樹」の文章を紹介します。各階のフロアーには、読書紹介のツリーも飾られていますよね。こちらにもきっと素晴らしい出会いが待っているはずです。　以下引用



目からウロコの愛の心得

世間はクリスマスである。

娘がはやばやと東京へ去り、合気道の納会も、すす払いも終了し、美しく静まりかえった家で、お仕事三昧、読書三昧、音楽三昧、美食三昧の日々である。

昔はクリスマスには女の子とデートをしていた。

私はそういうときにはちゃんとしたレストランで食事をして、それなりのプレゼントを差し上げて、タクシーでおうちまで送るという、女の子からすれば「たいへん好都合な男」であった。

そのせいか、私は若いころ、けっこうもてた。

それも当然である。ご飯を奢ってくれて、プレゼントも貢いでくれて、呼べば飛んできて、ほっておいても怒らない、別れてもあとくされがないんだから。女の子にしてみれば理想的に「好都合な男」なんだもの。これでもてないはずがない。

しかし、このように達観するまでにはいろいろと苦難もあったのである。高校生のころまでは「とにかくしつこくつきまとう」のが愛情表現だと思っていた。しかし、どういうわけか、しつこくつきまとって好きだ好きだ好きだとわめきちらすと、すべての女の子は走って逃げてしまうのである。

これはまずい。こういうときに発想の切り替えが早いのが私の取り柄である。私は問いを反転したのである。どのようなガールフレンドを私は理想としているのか？

都合のいいときにはいつでも遊びに来てくれるが、私の行状には好意的無関心を維持し、こまめにプレゼントをくれて、私が「別れよう」と言ったら黙って身を引いてくれて、別れたあとにもにこにこと友達づきあいしてくれる女の子……それこそ、私が求める理想のガールフレンドであることは贅言を要さない。

なんだ、それを逆にすればいいんじゃないか。

私は目からウロコが落ちた。こちらがしてほしいことをそっくり相手にしてあげればよいのである。

私が二十歳くらいのときにエリック・シーガルという人の『ラブ・ストーリー』という恋愛小説とその映画化（『ある愛の詩』）が大ヒットしたことがあった。そのときの宣伝コピーがLove is not to say sorry. というものであった。

これを配給会社は「愛とは後悔しないこと」と訳したが、これはちょっと訳語として不適切である。

「愛とは後悔しないこと」では、「とにかく後先考えずに情熱に身を任せて突っ走れ」というふうに誰でも理解するだろう。

しかし、物語の中での意味はそうではない。

この台詞は、身分違いの娘と結婚した息子を勘当にした父親が、夭逝したその娘の葬儀のときに数年ぶりに会った息子にI'm sorry（「すまないことをした」）と悔いの言葉を告げるのに対して、息子が冷たく返す言葉なのである。「もし、あなたが私を愛していたのであれば、あとになってから『すまない』などと言うような行為をするはずがない。つまり、あなたは息子である私を昔も今も愛してなどいないのである」という、これは「絶縁の言葉」なのである。「愛」というのは、あとで「すまない」と言わねばならないような仕儀に立ち入らないように、一瞬たりとも気を緩めないほどに張り詰めた対人関係のことである、ということをわたしはこのとき学んで、「おおお」と目から二枚目のウロコを落としたのである。

「自分にとっては快楽であるが、相手にとっては迷惑なこと」を選択的に相手に向かってするばかりか、その迷惑に相手が耐えることを「愛の証」だと信じている人がいる。



それは話が逆である。

「愛する」というのは「相手の努力で私が快適になる」ような人間関係ではなく、「私の努力で相手が快適になる」ような人間関係を築くことなのである。

それ以外のどのような人間関係も「愛」という言葉には値しない。私はそう思う。　内田　樹

本気を根気強く

2年

2024 年度第 103 回全国高校サッカー選手権大会（以後、選手権）は、群馬県の前橋育英高校が2度目の優勝を果たし幕を閉じました。前橋育英を率いたのが、サッカー部監督就任 42 年目（当時）の、山田耕介先生です。今回はこの山田先生について書きたいと思います。

山田先生は長崎県の生まれで、同県島原商業高校の出身です。先生は高校時代サッカー部に所属していましたが、当時、同部を率いていたのが、後に同県国見高校を6回の選手権優勝に導く、名将小峯忠敏先生でした。山田先生自身も高校3年時はキャプテンとしてインターハイ優勝を果たしています。小峯先生の薫陶を受けた山田先生は、小峯先生の背中を追いかけて、大学卒業後は、前橋育英高校で教員、そしてサッカーの指導者としてのキャリアをスタートさせます。

山田先生が赴任した当初は弱小のサッカー部でしたが、それでも監督就任初年度、同校サッカー部はインターハイ初出場、5年後には選手権に初出場します。その後は、全国大会の常連校となり、2009 年にはインターハイ初優勝、2017 年には選手権でも初優勝を果たします。現在では同校サッカー部からプロになった選手も 100 人を超えました。

この大偉業を成し遂げる裏には常人には到底まねできない、「本気（の指導）を根気強く」続ける山田先生の毎日の生活習慣があります。

山田先生の毎朝は6時 30 分の出勤から始まります。諸資料に目を通し、7時 30 分には朝練を見ます。朝練後、コーチ陣と綿密にトレーニング方法等についてミーティング（共有）。その後は試合の分析等を行いますが、同じ試合の動画を3回は見て、先生自らが編集、選手にフィードバックします。現代サッカーはものすごいスピードで進化しているので、先生自身が「サッカー」を学ぶことに余念がありません。常に新しい知識を学び続け、それを指導に還元しています。

16 時からはトレーニング。用事がない限り、毎日、顔を出します。指導において常に大事にしているのが、「人の話を聞く、そして考えることができる力（先生はこれらを人間力と呼んでいます。）の育成」です。なんとか選手たちにそういうことに気付いてほしいと日々、指導しています。この「人間力の育成」に共感して、前橋育英サッカー部に入る選手もいます。そして週に数日はサッカー部の寮に泊まり、選手を見守っています。こういう生活を、校長職、学監職の時代も含めて現在まで続けてきました。

どうしてこういう生活を 40 年以上も続けられるのか？ 山田先生は答えています。「本気で選手に向き合わないと、選手の本気度は上がってこない。だからこちらも本気でやるんだ。」と。続けて「この考え方は高校時代に受けた小峯先生の厳しいながらも愛情や熱意を感じた指導に原点はある。」とも言ってています。

物事に「本気」で取り組まなくても、それを「根気強く」続けなくても、人生は進みますが、山田先生のような生き方の方が、いい人生になる気がします。高校生活の後半、そして高校卒業後も、物事に本気で取り組み、それを根気強く続けてみてはどうでしょうか。今回書いたことは、You Tube にもアップされているので、時間があったらぜひ視聴してみてください。何か感じてもらえたら幸いです。